

2021年7月2日

Press Release

2021年度秋冬プログラム

りんご前線 — Hirosaki Encounters

会期：2021年9月18日（土） - 2022年1月30日（日）

弘前れんが倉庫美術館（青森県弘前市）

参加アーティスト：小林エリカ、斎藤麗、佐野ぬい、塙本悦雄、村上善男

+ ケリス・ワイン・エヴァンス

空間構成：蟻塚学

建築写真撮影：柴田祥



村上善男《気象 1998.11.6 射影》（西の窓）1999年

弘前大学50周年記念会館

撮影：柴田祥 [参考図版]

りんごのテロワール（土壤）・弘前 様々な出会いと遭遇の磁場

2021年度の展覧会は、英国を代表する現代アーティストのケリス・ワイン・エヴァンスのコミッショナーワーク（委託制作）を基点に二部構成で展開されます。第一部の「りんご宇宙—Apple Cycle / Cosmic Seed」展（2021年4月10日—8月29日）に続く、第二部となる本展は、りんごのテロワール（土壤）としての「弘前」の地に注目し、弘前ゆかりのアーティストたちの作品や当地との出会いから生まれた作品などで構成されます。

「前線」は、異なる気団の境界・交線で起こる大きな気象の変化や、運動の第一線などを意味します。この言葉をキーワードに、当地との出会いや、異なる世界との交差、自然と人工、現実と空想、近代と現代、東洋と西洋、過去と現在、または家族の歴史を通した自らのルーツの発見といった様々な遭遇や対峙・交流から生まれるエネルギーなどについて考えるとともに、弘前の風土性や場の力に関する思索を促します。

本展では、ケリス・ワイン・エヴァンスが弘前のりんごとの出会いから発想し、生み出した巨大なネオン彫刻を第一部から継続して展示します。弘前と様々な接点を持つ、世代も背景も大きく異なる6名のアーティストたちの絵画、彫刻、ドローイング、映像、インスタレーションなど多様な作品群を、美術館の空間に合わせて展示、紹介します。

また、毎回多角的なアプローチで地域性や創造的魅力を再考する「弘前エクスチェンジ」では、幅広い特集を通して津軽という地域を考察してきた雑誌『津軽学』の活動や、建築史において注目される弘前の近代建築や街並みにも光を当てます。さらには、会場構成や企画の一部に弘前の建築家や写真家も加わり、地域の様々な創造的活力に触れる機会にもなるでしょう。

広報に関するお問い合わせ

弘前れんが倉庫美術館 広報担当: 大澤、石川 (公)

TEL : 0172-32-8950 FAX : 0172-55-5982 E-mail: press@hirosaki-moca.jp ☎ 036-8188 青森県弘前市吉野町 2-1

展覧会のみどころ

1. 弘前と様々な接点を持つ、幅広い世代のアーティストたちの活動を紹介

弘前市の名誉市民である洋画家の佐野ぬいをはじめ、現在はパリを拠点に活動する弘前出身の斎藤麗、さらに、父親が弘前生まれというルーツをもち、小説執筆や漫画家、アーティストとして多彩な活動を展開する小林エリカなど、弘前ゆかりのアーティストたちの活動を紹介します。

2. 煉瓦倉庫を改修した展示空間に合わせた新作を含む展示

美術館のユニークな空間にあわせ、新作も含めた展示を行います。村上善男の展示は、故人を良く知る関係者の協力により「もし作家が生きていたら」という仮定に基づき、作品と美術館の空間との対話をはかるとともに、現在の視点から改めてその創作活動について考えます。

3. 地域誌『津軽学』の活動や、弘前の建築、街並みにもフォーカス

「弘前エクスチェンジ#04」では、2005年より幅広い特集を通して津軽という地域を考察してきた雑誌『津軽学』を、「場の力」や「地の記憶」という新たな視点から振り返ります。さらに、弘前の風景を特徴づける近代建築を写真家の柴田祥が新たな視点で撮り下ろします。また、本展の会場構成には、弘前を拠点に活動する建築家の蟻塚学が参加します。

4. 自由な展示のリズムと空間の使い方、異なる切り口による作品解釈

当館のために制作されたケリス・ワイン・エヴァンスの巨大なネオン彫刻は、第一部から継続して展示されます。本作を2つの異なるテーマの展覧会で展示することで、自由な展示のリズムと空間の使い方を模索するとともに、様々な角度から多様な作品解釈を促します。

【弘前エクスチェンジ】

当館では、弘前ゆかりのアーティスト、クリエイター、研究者らに注目し、異なる視点が交差・交換される場を生み出すごとで、新たなアプローチで地域性の考察、創造的魅力の再発見に繋がることを目指す「弘前エクスチェンジ」を年間を通して行なっています。

アーティスト・作品について

小林エリカ / KOBAYASHI Erika



小林エリカ《誕生》2021年

1978年、東京都生まれ、東京都在住。

目に見えない物、時間や歴史、家族や記憶、場所の痕跡から着想を得た作品で知られる。小説に散りばめられたフィクションとドキュメンタリーの要素が、私的なナラティブと社会のリアリティーの狭間で行き来する光景を追体験するようなインスタレーションを国内外で発表。2014年には小説「マダム・キュリーと朝食を」（集英社）で、第27回三島由紀夫賞・第151回芥川龍之介賞にノミネートされ、2020年、小説「トリニティ、トリニティ、トリニティ」（集英社）で第7回鉄犬ヘテロトピア文学賞受賞。近著は「最後の挨拶 His Last Bow」（講談社）。

本展では、弘前の第八師団軍医であった祖父や同地生まれの父の足跡を通して、過去や家族の歴史、弘前の土地に出会う個人的な旅から発展させたドローイングやテキスト、映像などによる展示を構想中。



Photo: Mie Morimoto

斎藤麗 / SAITO Lei



斎藤麗《Cossocossomogonie》2021年
Installation view at Palais Synodal,
Musée de Sens, Sens, France [参考図版]

1980年、青森県弘前市生まれ、パリ在住。

フォトグラフィー、彫刻、タイトル、ドローイング、パフォーマンスなど、様々なテクニックを組み合わせ、誰も見たことのない、けれどどこかで見た何かを思い起こさせる「風景」としてのインスタレーションを構成する。しばしばギリシャ神話やイタリアのルネサンス絵画、日常の細部や宇宙的リズムに着想を得たその風景は、ときに古代のモザイクや、南極の流氷下深海の不可視的な世界にも似た、新しいシナリオを空間に織りなす。ポンピドゥーセンターのウェブシリーズ Mon Oeil に《Paysages délicieux》から5つのエピソードが紹介されている。初めての書籍を Is-Land édition から秋に出版予定（仏英日語）。

本展では、美術館の空間や弘前の風景に合わせて、新たなセラミック作品を含む多様な素材、形態の作品を組み合わせたインスタレーションを構想中。



Photo: Thomas Chéné

佐野ぬい / SANO Nui



佐野ぬい《青の時間》2014年 青森県立美術館蔵
(弘前市民会館ステンドグラス原画)

1932年、青森県弘前市生まれ、東京都在住。

1950年代の制作初期から一貫して多くの青を基調とした作品を描き、「青の画家」として知られる。リズムをともなう色面の構成を通して、青の豊かな表現を展開。カンヴァスに描かれた絵画作品の他、壁画やステンドグラスなど公共空間のための作品も制作している。1955年、女子美術大学芸術学部洋画科卒業。1994年、青森県褒賞文化功労者。1996年、パリにて個展(00、03年)。2001年、青森県文化賞受賞。2007~11年、女子美術大学学長。2012年、瑞宝中綬章受章。2015年、弘前市名誉市民。現在、女子美術大学名誉教授、新制作協会会員。

本展では、かつてのシードル工場を改修した当館の独自の展示空間にあわせて、「原点」と「現在」、作家自身がかつて想像した「夢の美術館」などをキーワードに、展示内容・空間構成を構想中。



塚本悦雄 / TSUKAMOTO Etsuo



塚本悦雄《ツガルビューティー》2016年

1962年、熊本県生まれ、青森県弘前市在住。

自然に対する人間の行為をテーマに、彫刻をつくることもその一部と捉え、粘土・石・木などを素材とした具象彫刻やドローイングをオーソドックスな手法で制作する。近年は津軽の自然や文化に関する身近な存在をモチーフとする作品を中心に発表している。

本展では、近年の作品の中から津軽特有のものとして飼育されている生物であるマメコバチや津軽錦をモチーフにした代表作と新作の大型ドローイング等を展示予定。また、展示室内にアトリエをしつらえ、会期中に継続的に公開制作を行うプロジェクトを構想中。



写真提供：
青森公立大学
国際芸術センター青森

村上善男 / MURAKAMI Yoshio



村上善男 《気象 1998.11.6 射影》（西の窓）1999年
弘前大学 50周年記念会館
撮影：柴田祥 [参考図版]

1933年、岩手県生まれ。2006年、同地にて没。

緻密な計算による画面構成と抑制的効いた色彩を持つ理知的な作風に特徴をもつ。1950年代以降、生涯にわたり東北を拠点に精力的に活動し、1960年からは注射針を主媒体としたシリーズを制作。その後、気象図、貨車を種別する記号を主題に用いたシリーズへと展開した。1982年、弘前市に移り、弘前大学で教鞭を執る傍ら、古文書や染め布などを画面に貼りつけた「釘打ち」シリーズを制作。詩の創作も行うなど、多岐にわたる作品を残した。

本展では、弘前の人々との関係性で作られ、守られてきた作品やポスターなど幅広い内容で、村上の創作の多様性や民俗と前衛の関係を感じさせる作品群を展示。

（協力：鎌田紳爾、木村正幸、田中久元）



ケリス・ワイン・エヴァンス / Cerith WYN EVANS



ケリス・ワイン・エヴァンス
《Drawing in Light (and Time) ...suspended》2020年
弘前れんが倉庫美術館蔵
Photo: ToLoLo studio

1958年、英国、ウェールズ生まれ。英国、ロンドン在住。

1980年代から実験的な映像作品を手がけ1990年代以降はネオン、音、鏡などを用いて制作。哲学や音楽、天文学、物理学など多様な分野に基づく作品は、国際的に高い評価を得ている。各国の主要美術館で個展を行っており、第50回ヴェネツィア・ビエンナーレ国際美術展ウェールズ館代表（イタリア、2003年）。ヘップワース彫刻賞受賞（英国、2018年）。

第一部の「りんご宇宙—Apple Cycle / Cosmic Seed」展に引き続き、弘前のりんごとの出会いから生まれた《Drawing in Light (and Time) ...suspended》（2020年）を展示するとともに、第二部となる本展のテーマにあわせて、彫刻や建築、写真、二次元と三次元の間を繋ぐ写真作品「Spatial Intervention」シリーズ（2020年）数点を新たに展示。



Photo: Ali Janka

空間構成 |

蟻塚学 / ARITSUKA Manabu (建築家)

1979 年、青森県弘前市生まれ、弘前市在住。

三分一博志建築設計事務所を経て 2008 年に蟻塚学建築設計事務所を設立。県内外の住宅等の設計の他、地域や人と関わるプロジェクトにも携わる。

「弘前エクスチェンジ#04」の展示を中心に、本展の空間構成を担当。

建築写真撮影 |

柴田祥 / SHIBATA Sho (写真家)

1981 年、青森県平川市出身、弘前市在住。

自然や鉄道など、地元青森の津軽地方の風景を中心に撮影した写真作品を制作する。

「弘前エクスチェンジ#04」の展示における、弘前の近代建築や街並みの撮影を担当。

関連プログラム

オープニングトーク

参加アーティストおよび本展キュレーターによるトークを開催します。

日時 | 2021 年 9 月 18 日 (土) 14:00 – 16:00

会場 | ライブラリー

料金 | 参加無料

定員 | 30 名

ギャラリーツアー

会期中は学芸スタッフによるギャラリーツアーを開催します。

日時 | 本展会期中 毎週日曜日 11:00 – 12:00

料金 | 参加無料 (要当日観覧券)

定員 | 10 名

申込み | 不要 (当日先着順)

集合場所 | 1 階受付前

※トークの詳細や申込方法、その他のプログラムについては決まり次第ウェブサイト等で発表します。

開催概要

- | プログラム名： 2021 年度 秋冬プログラム
「りんご前線 — Hirosaki Encounters」
- | 会期： 2021 年 9 月 18 日（土） - 2022 年 1 月 30 日（日）
- | 開館時間： 9:00 - 17:00 （入館は閉館の 30 分前まで）
- | 休館日： 火曜日（祝日の場合は翌日に振替）
※ ただし 11 月 23 日（火・祝）は開館、翌 11 月 24 日（水）は休館。
※ 12 月 26 日（日） - 1 月 1 日（土）は休館
- | 観覧料： 一般 1,300 円（1,200 円） 大学生・専門学校生 1,000 円（900 円）
※ () 内は 20 名様以上の団体料金
※ 以下の方は無料
高校生以下の方/弘前市内の留学生の方/満 65 歳以上の弘前市民の方
ひろさき多子家族応援パスポートをご持参の方/障がいのある方と付添の方 1 名
- | 主催： 弘前れんが倉庫美術館
- | ゲスト・キュレーター： 三木あき子
- | 会場： 弘前れんが倉庫美術館 ☎036-8188 青森県弘前市吉野町 2-1
- | 一般問合せ： TEL: 0172-32-8950
- | アクセス： JR 弘前駅より
- 弘南バス・土手町循環 100 円バス「土手町十文字」下車 徒歩 約 4 分
- 徒歩 約 20 分
- タクシー 約 7 分
- | ウェブサイト： <http://www.hirosaki-moca.jp>
- | SNS： Instagram : @hirosaki_moca
Twitter : @hirosaki_moca
Facebook : @hirosaki.moca

広報に関するお問い合わせ

弘前れんが倉庫美術館 広報担当: 大澤、石川 (公)

TEL : 0172-32-8950 FAX : 0172-55-5982 E-mail: press@hirosaki-moca.jp ☎036-8188 青森県弘前市吉野町 2-1

FAX: 0172-55-5982 または E-MAIL: press@hirosaki-moca.jp

2021年7月2日

弘前れんが倉庫美術館（青森県弘前市）

りんご前線—Hirosaki Encounters

会期：2021年9月18日（土）- 2022年1月30日（日）

広報画像申請書

▼貴媒体についてお知らせください。

| 媒体名

| 貴社名

| ご担当者

| 所属部署

| ご住所 〒

| 電話番号

| FAX 番号

| E-MAIL

| 掲載・放映の予定が決まっていたらお知らせください。

年 月 日

| 読者プレゼントのご希望 希望する 組 名様 (2021年12月31日迄 掲載対象) 希望しない

*画像1点以上ご掲載の場合、本展の招待券10枚まで提供します。 / 美術館までの交通費は自己負担のご案内をお願いします。

▼広報画像は、希望される画像の番号に「○」で印をつけてください

広報画像にはすべて以下キャプション・クレジットを併記してください

[1]



村上善男《気象 1998.11.6 射影》(西の窓)

1999年 弘前大学50周年記念会館

撮影：柴田祥 [参考図版]

[2]



小林エリカ《誕生》2021年

[3]



斎藤麗《Cossocossomogonie》2021年

Installation view at Palais Synodal,

Musée de Sens, Sens, France [参考図版]

[4]



塚本悦雄《ツガルビューティー》

2016年

[5]

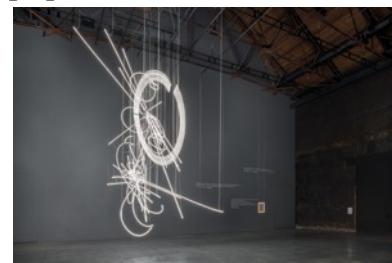


佐野ぬい《青の時間》2014年

青森県立美術館蔵

(弘前市民会館ステンドグラス原画)

[6]



ケリス・ワイン・エヴァンス

《Drawing in Light (and Time) ...suspended》

2020年 弘前れんが倉庫美術館蔵

Photo: ToLoLo studio

<広報画像、取扱に関する規定>

- 広報画像の使用は美術館をご紹介いただく場合のみとさせていただきます。
- 広報画像をご紹介いただく場合、指定のキャプションとクレジットを必ずご記載ください。
- 全図で使用してください。トリミング、変形、部分使用、文字のせは原則禁止となっております。
- 掲載記事・番組内容については、基本情報確認のため、可能な範囲でゲラ刷り・原稿の段階で広報までFAXまたはメールでお送りください。

広報に関するお問い合わせ

弘前れんが倉庫美術館 広報担当：大澤、石川（公）

TEL：0172-32-8950 FAX：0172-55-5982 E-mail：press@hirosaki-moca.jp ☎036-8188 青森県弘前市吉野町 2-1